

市内にある古城山は化石の宝庫で、中には宇和島の名を冠した白亜紀後期の二枚貝、イノセラムス・ウワジメンシスもある。小学校では化石探しの体験授業もあったし、中学校の理科室には巨大なアンモナイトが威容を放っていた。

昔のことだが、ある日、小学生の甥っ子がアンモナイトを拾ったと駆け込んで来た。古城山からの地層なのか？ 僕の家裏に流れる小川で見付けたと言っ。黒灰色の石に立派なアンモナイトがくっついて同化している。感心し「やったね！」と褒めた。

一緒にその場所に取って返し、今度は僕が茶色っぽい石に怪しい穴があるのを発見。奥深くまでたまった泥を除くと、アンモナイトが抜けた痕跡がくっきりと

現れた。二つ並べると大きさも同じくらい、奇しくもペアのようにそろった。

そこで、彼が拾ったアンモナイトを「くれないか」と言ってみた。すると「いよいよ渡してくれたのだ。たとえ欲しくてもなせ子供に。僕はその時、あえて大人と子供の垣根を取っ払ってねだったつもりだった。

少年とアンモナイト

結果、歳を超えて通じ合えたど、いい気になってしまったのだ。彼は彼で、大人に応える行為が誇らしそうに、安心して受け取ってしまった。

それから30年以上も経って、思いもよらぬことが間接的に耳に入ってきた。僕にアンモナイトを取られた。しかもその対価にお金

をもらったと彼が言っていた。えっ！とろろたえ当惑し、一瞬にしている思い出が壊れた。

重い気分は続き、このままではと会うことにした。彼は43歳の大人になっていた。謝罪し、アンモナイトを返した。その日のことは



彼もよく覚えていて、お礼にと、子供にとっては大金を渡された。だとしたら、後ろめたさからくるごまかしとか考えられない。僕は恥じ入った。

取られたということについて、何かの拍子に言いたかもしれないが、それよ

りも僕が欲しかったのがうれしく、そつでなければあげないと。彼が大人になればこそ言葉とも思ったが、繰り返して言ってくれ、通底するものはあったのだと、少し気持ちが治まった。

僕はいわゆる子供扱いというものをしない、いや、できない人間だとずっと思ってきた。だから子供の前で緊張するし、歳の差などで侮らず、対等に接していたつもりなのにこんなことが起きてしまう。奪われたという感覚が彼に少しでもあったとすれば、そこに気付かないのは大人の傲慢さであろう。僕はどこかで、子供に好かれようと「わかる大人」を演じていたのかもしれない。

子供のピュアな視線は、大人を見透かしている。

(吉田 淳治・画家)